

南アルプスにおけるライチョウの長距離移動 (速報)

朝倉俊治* 1、増田章二* 1、近藤多美子* 1、堀田昌伸* 2

筆者らは、2007 年よりライチョウ (*Lagopus muta japonica*) の分布南限地域である南アルプス南部の上河内岳(2803m)から茶臼岳(2604m)、仁田岳(2524m)、イザルガ岳(2540m)において標識調査を開始し、これまでに 48 羽へ個体識別用のカラーリング(3つ)と環境省金属リング(1つ)を装着した。現地調査は毎年無雪期に行い、およそ月 1 回実施している。

本年における現地調査時に筆者らが装着したカラーリングパターンと異なる 2 個体を確認し、その個体の標識場所が判明したので報告する。

2016 年 6 月 3 日に確認した個体 (以下、B 個体) は、茶臼岳山頂北側の尾根の茶臼小屋へ下る分岐 30m 南にいたペアのメス成鳥であった。カラーリングは 3 つ確認され、左足に黄、右足下が青、右足上が赤であった。そのペアのオス成鳥には金属リング及びカラーリングが装着されていなかった。2016 年 10 月 2 日に確認した個体 (以下、A 個体) は、上河内岳竹内門近くの西側斜面にいた 6 羽の群れの 1 羽で、メス成鳥であった。カラーリングは 4 つ確認され、左足の下が黄、左足の上が白、右足の下が黒、右足の上が赤であった。群れの他の個体は標識されていなかった。信州大学名誉教授中村浩志氏によると、B 個体は 2013 年 9 月 22 日に南アルプス間ノ岳で標識した 3 羽のヒナのうちの 1 羽であると判断されるとのことであった。また、A 個体は 2015 年 9 月 16 日に南アルプスの仙丈岳で標識したヒナということであった。これら 2 羽は、いずれもヒナの時に装着されたことから出生地より移動したと考えられる。B 個体は標識から約 2 年 8 ヶ月半後、A 個体は標識から 1 年 1 ヶ月後の確認となる。標識地と確認地とは、A 個体でおよそ 38km、B 個体でおよそ 30km 離れている。

これまでの南アルプスにおける若鳥の分散記録は南アルプス北部地域で 4 例 (農鳥小屋→仙丈岳、北岳→観音岳、仙丈岳→間ノ岳、仙丈岳→中白根岳) 示されており、およそ 10 km 前後の分散距離である (一般財団法人自然環境研究センター(2016))。

中村(2007)は、これまでに一時的な棲息が確認されたライチョウの記録と既存生息地との関係からライチョウの飛ぶ能力または移動する能力として 25km としている。今回の 2 個体は南アルプス稜線沿いに立地する高山を経由しながら長距離移動したと考えられる。

* 1 静岡ライチョウ研究会 * 2 長野県環境保全研究所